

## 「主の記念式」に関する考察

主の記念式（主の晩餐）に関して主に引用されるのはルカの記録です。  
まずその部分をここに引用します。

(ルカ 22:15 - 20)

15 イエスは彼らに言われた、「わたしは、苦しみを受ける前にあなた方と一緒にこの過ぎ越しの食事をするのを大いに望んできました。

16 あなた方に言いますが、それが神の王国で成就するまで、わたしは二度とそれを食べないのです」。

17 それから杯を受け取り、感謝をささげてからこう言われた。「これを取り、あなた方の間で順に回しなさい。

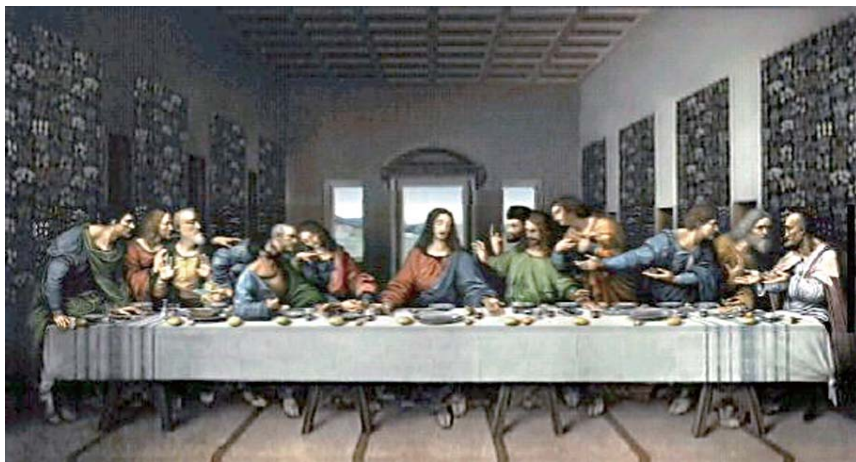
18 あなた方に言いますが、今からのち、神の王国が到来するまで、わたしはぶどうの木の産物を二度と飲まないのです」。

19 また、イエスはパンを取り、感謝をささげてそれを割き、それを彼らに与えて、こう言われた。「これは、あなた方のために与えられるわたしの体を表わしています。わたしの記念としてこれを行ないつづけなさい」。

20 また、晩さんがすんでから、杯をも同じようにして、こう言われた。「この杯は、わたしの血による新しい契約を表わしています。それはあなた方のために注ぎ出されることになっています」。

キリストは弟子たちに向かって、「それ（過ぎ越し）が神の王国において成就するまで」、「神の王国が到来するまで」イエスはもはや彼らと過ぎ越しの食を共にすることは決してない、また、ぶどうの木の産物を二度と飲まないと言われていました。

すなわち、まもなく死んでこの世を去ることを彼らに告げておられます。今日が最後であり、飲み納めであることを強調して、その切迫したご自分の死を強く意識しておられたことがわかります。



このルカの記述から、いわゆる「主の記念式（聖餐式）」をキリストご自身が制定された記録として、理解され、その式典の様式の出所となってる記述ですが、マタイやマルコではそうした事を示す記述は何もありません。これはルカだけの特徴で、大きく異なっている点です。

たとえば、ルカ22：17で杯を「順に回しなさい。」と訳されている部分ですが、そのギリシャ語は「ディアメリゾー」で、「部分に分割する、分配する、配布する」という意味の語です。

同じ語はルカ12：53では「分裂し」、マタイ27：35やヨハネ19：24では（キリストの外衣を）「分配し」と訳されています。まさか、それを「回して」みんなで1回ずつ羽織ってみたと言うことではないでしょう。

一つの杯を11人全員で「回しのみ」をした事は、可能性として、まったくないわけではありませんが、はっきりしないことを、断定的に述べるのはどうでしょうか。

この語を、「順に回す」と具体的な表現で訳すのは、本文にはない、翻訳者の勝手なイメージを、読者の脳裏に作り出させるものとなり、「書かれている事を超え」かねない訳で、とうてい感心できるものではありません。

さて、ルカと、マタイ、マルコの記述との重大な相違点に注意を向けたいと思います。先ず、平行記述を引用します。

(マタイ 26:26-29) 彼らが食事を続けていると、イエスはパンを取り、祝とうを述べてからそれを割き、弟子たちに与えて、こう言われた。「取って、食べなさい。これはわたしの体を表わしています」。

また、杯を取り、感謝をささげてからそれを彼らに与え、こう言われた。「あなた方はみな、それから飲みなさい。

28「これはわたしの『契約の血』を表わしており、それは、罪の許しのため、多くの人のために注ぎ出されることになっているのです。

29「しかしあなた方に言いますが、わたしの父の王国であなた方と共にその新しいものを飲むその日まで、わたしは今後決してぶどうの木のこの産物を飲みません」。

(マルコ 14:22-24) そして、彼らが食事を続けていると、[イエス]はパンを取って祝とうを述べ、それを割いて彼らに与え、「取りなさい。これはわたしの体を表わしています」と言われた。

また、杯を取り、感謝をささげてから、それを彼らにお与えになった。それで彼らは皆その[杯]から飲んだ。

24「そうして[イエス]は彼らに言われた、「これはわたしの『契約の血』を表わしています。それは多くの人のために注ぎ出されることになっています。

25「あなた方に真実に言いますが、神の王国でその新しいものを飲むその日まで、わたしはぶどうの木の産物をもう決して飲まないでしょう」

それで、この相違点については、さらに検討の余地がありそうです。

まず1つ目の問題点は、ルカ22：17－20については、シナイ写本など、多くの写本の間には混乱があります。その幾つかを挙げてみます。

(写本①) 17、18節が19節の後に置かれているもの。

(写本②) 17、18節を全く除いているもの。

(写本③) 19、20節前半の「また、晩さんがすんでから・・・」の後に、17節が続き、その後20後半の「この杯は、わたしの・・・」と続き、そして18節の順序になっているもの。

(写本④) 19節を「イエスはパンを取り、感謝をささげてそれを割き、それを彼らに与えて、こう言われた。「これは、わたしの体です。」とし、「あなた方のために与えられる」、「わたしの記念としてこれを行ないつづけなさい」。という部分と、20節全体を欠いているもの

(原本⑤) 現行訳と同様なもの。

さて、なぜこのような事態が見られるのかということ推察するに際して、まず、ルカの一連のこの部分の記述を内容的に簡潔に箇条書きにしてみることにします。

15 キリストは過ぎ越しを弟子たちと共にすることを切望してきた。

16 キリストは王国樹立まで過ぎ越しの食事をしない

17 杯を弟子たちに分配

18 キリストは王国樹立まで葡萄酒を飲まない

19 パンを弟子たちに分配。それは弟子たちのための私の体である。記念として行い続けよ。

20 (過ぎ越しの) 晩餐の後、杯も同様にし、それは契約のための血であり、弟子たちのために注ぎ出される。

この出来事の流れと、他の福音書を比較するために、マタイ、マルコの記述を分析します。まず両者とも「彼らが食事を続けていると、・・・」から始まっているように、この後のことは、明らかにそれまでの食事とは異なった、特別な意味のある飲食となることが印象付けられています。

そして、順番はつぎのとおりです。

A 先ず： パンを取り、感謝を捧げてから分配し、「それは、わたしの体である」と宣言

B 次に： 杯を取り、感謝を捧げてから、分配し、「それは、契約の血であり、多くの人のために注ぎ出される」と宣言

C 最後に： 「王国樹立まで葡萄酒をのまない」と宣言

ややこしいので、分析しますと、繰り返しにはなりますが、ルカの方は、  
 先ず： 杯を取り、感謝を捧げてから分配し、「王国樹立まで葡萄酒をのまない」と宣言し。  
 (マタイ、マルコのBとCの合体)  
 次に： パンを取り、感謝を捧げてから分配し、「それは、わたしの体である」と宣言 (マタイ、マルコのA)  
 次に： 晩餐が済んだ後、杯を取り、感謝を捧げてから、分配し、「それは、契約の血であり、多くの人のために注ぎ出される」と宣言 (マタイ、マルコのB)  
 (「杯をも同じようにして」という表現は、それを取り上げ、感謝を捧げてから、というパンの場合の手順をそっくり繰り返したと言う意味であると言えます)

つまり、現行の訳の聖書によれば、ルカの記述だけ、パンと杯の順番が入れ替わっており、杯の記述が重複しているのに気付きます。また、最初の杯の記述 (17 節) の中に「これは私の契約の血である」という言及がなされていません。  
 さらに、20 節は「晩餐が済んだ後」となっていますので、これは、マタイ、マルコの「彼らが食事を続けていると、・・・」に匹敵する部分と考えられます。  
 つまり、イエスはそれまで、年ごとに行われてきた通常の過ぎ越しの食事を続けている時、やおら、パンを取って割き、祈ってから、分配し始められたので、弟子たちも、晩餐は終わって、別の何かを始められたと感じ取ったことでしょう。  
 このタイミングが、ルカでは、20 節の「また、晩さんがすんでから・・・」の部分と考えられるのに、すでにパンと杯を分配したあとであるのはマタイ、マルコの記述と矛盾することになります。  
 あるいは、パンと葡萄酒に関する特別な意味を持つこの一連の出来事がすべて「晩餐」の中に含まれるとしたら、晩餐が済んでから、さらにもう一度、杯を与えられたことになり、いずれにしても、別の矛盾点が生じてくることになります。  
 さて、改めて、なぜこのような事態が見られるのかということの、種明かしとも言うべき、次の聖書学者の推察を考慮して下さい。

「考えられるのは、これらの写本の混乱の中で、おそらく上記の (写本④) が本来の原形であったのを、他の福音書と同じように、その形体を整えるためにコリント第一 11:23 - 25 あたりから借用してここに挿入したのが現行訳の (原本⑤) であり、しかしその結果生じてしまった杯の記述の重複を防ぐために、変更を加えたのが (写本①～③) であろうとする学説がありますが、様々な状況からこれが最も真実に近いと考えられます。」- 参考：黒崎幸吉 著 「注解 新約聖書」による

実際に、ルカとコリントの句を比較してみることにしましょう。

(コリント第一 11:23 - 26) 23 わたしは、自分が主から受けたこと、それをあなた方に伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡されようとしていた夜、ひとつのパンを取り、

24 感謝をささげてからそれを割き、こう言われました。「これはあなた方のためのわたしの体を表わしています。わたしの記念としてこれを行なってゆきなさい」。25 晩さんをすませた後、杯についても同じようにして、こう言われました。「この杯はわたしの血による新しい契約を表わしています。それを飲むたびに、わたしの記念としてこれを行なってゆきなさい」。26 このパンを食べ、この杯を飲むたびに、あなた方は主の死をふれ告げてゆくのであり、それは彼が到来する時にまで及ぶのです。

すでに前述したように、パンと葡萄酒の出来事のさらにその後、20節で「また、晩さんがすんでから、杯をも同じようにして・・・」と続いているのは、明らかにコリント11:25の「晩さんをすませた後、杯についても同じようにして・・・」という酷似した句が、そこから採られてルカに付け加えられたと見るのは、学者でなくとも、その可能性が極めて高いと認めることができます。

それで、ルカ22章の本来の聖書原文は次のような内容であったと判断されます  
(参考文献：[Schlatter, Erläuterungen zum Neuen Testament.][Meyer, Commentary on the Bible.][Johannes Weiss, Die Schriften des Neuen Testament.][Zahn, Kommentar zum Neuen Testament.])

22:19 「また、イエスはパンを取り、感謝をささげてそれを割き、それを彼らに与えて、こう言われた。『これは、わたしの体です。』」

22:20 — (無し)

(多くのギリシャ語テキスト[ギリシャ正教会、ステファナス公認本文、ビザンティウム／マジョリティテキスト、公認本文など]のルカ22:20の前半部分は、コリント11:25と、ギリシャ語の単語もその語順も同一であることを見ると、明らかにコピー&ペーストされたと言えると思います)

これを裏付ける更なる証拠は、多くの古代写本から確認できます。

新世界訳聖書—参照資料付きのルカ22:19, 20の脚注を見ますとこう記されています。

「パピ写75, シナ写, アレ写, バチ写, ワシ写, ウル訳, シリ訳へ, ペ, アル訳による; ベザ写と古ラ訳は、19節の「あなた方のために与えられる」に相当する部分と20節を省いている。」

この写本の略号の意味は次のとおりです。

パピ写75 → ボドメル・パピルス14, 15号、200年ごろ

シナ写 → シナイ写本 4世紀

アレ写 → アレクサンドリア写本5世紀

バチ写 → バチカン写本 4世紀

ワシ写 → フリーア福音書、5世紀  
 ウル訳 → ラテン語ウルガタ訳、ヒエロニムス訳400年ごろ  
 シリ訳へ → シリア語フィロクセヌス・ヘラクレア訳6、7世紀  
 シリ訳ペ → シリア語ペシタ訳、5世紀  
 ベザ写 → ベザ写本 5, 6世紀  
 古ラ訳 → 古ラテン語訳、2-4世紀

ここからもおわかりのように特に「パピ写 75」は注目に値します。

パピ写 75 は AD200 年頃という古さですから、使徒たちから僅か 150 年くらい後です。歴史の長さから見たら、ほんの何世代か後の時代です。

この「パピ写 75」に関しては、「洞察」の本にこのように言及されています。

『特に注目に値するのは、いずれも西暦 200 年ごろに書かれた、ボドメル・パピルス 2 (パピ写 66) とボドメル・パピルス 14 および 15 (パピ写 75) です。ボドメル・パピルス 2 にはヨハネの福音書の相当の部分が含まれている一方、ボドメル・パピルス 14 および 15 にはルカによる書とヨハネによる書のかかなりの箇所が含まれており、これら後者の写本は本文上、バチカン写本 1209 号に非常に近いものです。』

ものみの塔聖書冊子協会発行 「聖書に対する洞察」2巻8～9ページ

そしてシリア語フィロクセヌス・ヘラクレア訳は 7 世紀ということですから、西暦 7 世紀あたりまで、これらの句は聖書には存在しなかったということです。

ところで、これらの写本は、ものみの塔の言うように、ルカ 22:19 後半と 20 節を「省いている」のでしょうか。

「省く」というのは本来「ある」べき（はず）のものを載せていないと言う意味です。

これだけ多くの古い写本に、それが存在しないと言う事実は、「省かれている」のではなく明らかに、後で「書き加えられた」と結論するのが理に適っていますので、「後代の加筆」と表現するのが正しいのではないのでしょうか。

それで、ひとまずここで、記念式に関して、ルカ 22 章の記述の持つ意味について、一つの結論を出しておきましょう。

当時の弟子たちの間で、これらの出来事が儀式として確立された要因として、この最後の晩餐が彼らの心に与えた印象によることに疑いないでしょうし、たしかにそれはキリストご自身が意図された、キリストの贖いとしての重要性を覚え続ける事に役立ったことでしょう。

しかし、マタイ、マルコの福音書や、ルカによる書の古代写本からの考察から言えることは、この時、イエスご自身が自ら記念日を制定されたと考えることは、少なくとも、福音書の記録からは、これを断定する証拠はないと言えます。

過ぎ越しの祭りに関しては、日にちや時間的要素、年ごとに守るべきことなどが実に詳細に、そして、何度も繰り返し語られ、旧約にはそれに関する多くの記述があります。では、より重要な意味を持つ、その成就に関するパンと葡萄酒を用いたこの出来事が、記念日として「制定」されるべきものであったなら、なぜ、そうした言及が一言もないのでしょうか。

では、今度はコリント第一 11章の記述に目を向けてその事を考察してみることにします。

まずそこでパウロは、「わたしは、自分が主から受けたこと、それをあなた方に伝えたのです。」と述べています。

晚餐のその場には居合わせなかったパウロが、どのようにこの情報を得たのかは定かではありませんが、少なくとも26節あたりまでは、「主から受けたこと」に含まれると考えられます。

「わたしの記念としてこれを行なってゆきなさい」という言葉に注目します。

「これ」とは何のことでしょうか

パウロのこの記述によれば、パンの場合と杯の場合の両方で同じ言葉が繰り返されています。

ですから、「これ」はパンと杯に共通する「何か」ということになります。

「これ」を指す要素をあげるとすれば、「一つのを皆で分配する」「事前の祈り」くらいしかなさそうに思えます。

しかし、これらは、この時の特別な事ではなく、前例は幾つもあります。

例えば、5千人あるいは4千人の人々に、パンと魚を分け与えた際にも、それぞれの前に感謝の祈りを捧げてから分配しています。これは4福音書とも同様で、コリントのこの記述と酷似しています。

ですから、分け合うことや、事前に感謝の祈りを捧げることは、あえてここで、「これ」を行いなさいと特別に言い残すこととは考えにくいように思えます。

最後の過ぎ越しの際に、イエスが弟子たちに残したいと思われた（伝えたかった）ことは、何でしょうか。

パウロは26節で「この」パン、「この」杯と記しています（原語でも定冠詞がついています）ので、過ぎ越しの食事の後、イエスが取られた、種を入れないパンと葡萄酒を飲食することと、キリストの贖いを記念することが結びつけられていることが分かります。

いつから過ぎ越しに葡萄酒が伴うようになったのか定かではありませんが、過ぎ越しの祭り（規定として定められた宗教行事としての食事）は無酵母パンを苦菜と一緒に食べるというものであって、葡萄酒は「過ぎ越し」そのものには何の役割もありませんでした。

イエスは、最後の晚餐の時の、そのパンと（恐らく苦菜も）聖書的な規定に従って食事を

し、その途中から、そこにあったパンと葡萄酒に新たに意味を持たせて、それを飲食する時に過ぎ越しの預言的な意味の完全成就となる、ご自分の贖いとそのための死を記念することを望まれたのだと捉えることができます。

それで、「これ」とは、実際の行為としては、無酵母パンを食べ、と葡萄酒を飲むことですが、イエスが弟子たちに残したいと思われたのは、各人がキリストとその贖いを覚え、深く思いに刻み込むということでしょう。

次に「・・・を行ってゆきなさい」という訳に注目しましょう。

そのように訳されているギリシャ語は「ポイエイテ」（動詞 - 現在形 能動相 命令法 - 二人称）です。

なお、ギリシャ語の現在形は、「ある行為が今現在継続している状態」と説明されているため、「〇〇し続ける」と訳されることがあるようですが、これは、飽くまで「現在」の行為が続いているということであって、将来に渡ってずっと継続し続けるという意味ではありません。

これを確証するものとして、この語「ポイエイテ」は聖書中に 34 箇所 出現しますが、幾つかの例をあげてみます。

(マタイ 3:3) …「聴け、だれかが荒野で叫んでいる。『あなた方はエホバの道を備えよ！その道路をまっすぐにせよ』」…「せよ」

(マタイ 21:13) …あなた方はそれを強盗の洞くつとしている。「している」

(マルコ 7:13) …そして多くのこれと同様の事をあなた方は行なっています。「行っています」

(ヨハネ 8:41) …あなた方は自分たちの父の業を行なっているのです」…「行なっている」

これらからも分かるように、この語が、この形で使われている他の聖句を調べ上げても、ポイエイテが継続的な意味あいでは表現されているところは、ありません。

なぜか、新世界訳では、ルカとコリントの、この晩餐の場面の時だけは、継続的な言い回しで訳されています。

コリント第一 11:20 には、次の記述があります

「あなた方は一つの場所に集まっても、主の晩さんを食べることはできません。」

それで、この時、会衆において「主の晩餐」のための習慣が確立していたことが分かります。しかし、ここでパウロが述べているのは、その時の精神態度を諭しているのもであって、式典の手順を説明するためでもなければ、パウロ自身がそれを制定したわけでもありません。時期や頻度については定かではありませんが、そのような、パンと葡萄酒を用いてキリストを思い起こすのは、キリストの意図に適うことであつたことは言うまでもありません。しかしやはりここでも、そして他のどの箇所にも、キリストの死を記念する食事が、守り行うべき記念日として制定されたと言える根拠はどこにも見いだせません。



1世紀当時のクリスチャンが習慣にしていたからと言って、それらが、歴史を通じて全てのクリスチャンが守り行うべき規定あるいは法令のように確立されるわけでもありません。

たとえば、かれらは、頻繁に「パンを割くための集まり」を持っていました。あるいは、使徒の活動の4:32には「信じた大勢の人々は心と魂を一つにし、だれひとり、自分の所有する物について、それが自分のものとは言わなかった。彼らはすべての物を共有したのである」と記されていますが、それは当時の彼らの習慣だっただけで、もちろん、そのクリスチャン精神を見倣うのは良い事ですが、それが、クリスチャンの掟になるわけでも、同様に行い続けるべき型として確立されたものになるわけではないのと同じです。

ところで、「わたしの記念として」と、訳されていますが、些細なことかも知れませんが、「～とする」のように「と」が入ると、日本語としては、「単なる記念」というようなニュアンスが強くなります。

例えば、「これを私からのあなたへ贈り物として、差し上げます。」と表現するのと「私からのあなたへの贈り物を差し上げます」と言った場合を比べると、贈ろうとする、気持ちの強さが違います。

前者は、贈り主が自分で選んで、自分で買って来たものじゃないかも知れません。

たまたま、その辺にあったものを、贈り物[と]することでも、プレゼントには違いありませんが、後者はストレートに、わたしに贈ってくれる目的で、選んで、買って、持ってきてくれたというニュアンスがあります。

むしろ、わたしとしては、もっともシンプルに次のように訳するのが適切かと思います。

「わたしを思いに留めるために、[今]これを行いなさい。」(執筆者訳) (ギ語:[ポイエイテ]は現在形なので、その意味を分かりやすくするために「今」を挿入しています。)

実際、他の著名なギリシャ語-日本語訳にも、こうした訳が多くあります。

「わたしを記念するため、このように行いなさい」(口語訳)

「わたしを記念するためにこのことを行ないなさい」。(塚本訳)

「わたしの記念にこのようになさい」(前田訳)

以上の事から、聖書に記されているパンと葡萄酒に関する記述は、その最重要な意図は、キリストとその贖いについての鋭敏な思いを堅く保つことであり、何月何日、日没などの日時や儀式や式典を守ることではないと言えます。

最後に「記念式」に関する幾つかの疑問について記しておきたいと思います。

最後の晩餐の「パンと葡萄酒の意義」について：

パンと葡萄酒ですが、それはキリストの「体」であり、「契約の血」であると述べられています。しかし、「それを食べ、飲む度に」とあるので、ともかく、たび重ねる性質のものであ

ると言えます。

それが仮に年に一度だったとすると、その効力、あるいは「契約」は1年で期限切れになってしまうものなのではないでしょうか。つまり、もし、パンを食べ葡萄酒を飲むことが、キリストとの個人的な「新しい契約」（天の王国に招かれることを意味する）の締結を意味するようなものであるなら、たびたび、あるいは少なくとも年に一度、契約更新をしなければならぬ性質のものということになってしまいます。

しかし、クリスチャンとしての新しい契約はバプテスマの時に、あるいは、その後、聖霊で油注がれる時に結ばれると考えられるものなので、ただ一度限りのものです。

したがって、パンと葡萄酒にあずかることは、キリストの贖いを改めてしっかりと思いに留めるための体験的な手助けとなるものであって、契約下にあるかどうか、誰が有資格者かなどという問題を云々することとは直接関係ないことと言えます。

バプテスマを受けたクリスチャンは皆、相応しいときに、パンと葡萄酒を用いて、キリストを深く思い起こすのは神のご意志であることに違いはないと言えます。

もし、敢えてそれをしない、あるいはしようとしないのであれば、それはキリストを認めようとしない人、アンティキリスト、日本語で「反キリスト」であることを神の御前に示す事になってしまいかねない問題を含んでいるかも知れません。

「主の記念式」いつまで？：

さらに、この習慣は、いつまで保たれる事になっているかということですが、それは「神の王国で成就するまで」、「神の王国が到来するまで」である、と繰り返し明確に言われています。

もし1914年に王国が樹立し、キリストの臨在が開始されたのであれば、この習慣もそこで完了し、もはやそれ以降、続けられるものではないはずです。

コリントの記述では、「それは彼が到来する時にまで及ぶのです」となっており、この習慣の完了時は、キリストの到来時までであるとしています。

このことから、王国の樹立とキリストの到来（臨在）は同時であることがわかります。

イエスが到来時に飲食される「パンと葡萄酒」とは：

イエスご自身の言われた、「神の王国で成就するまで、わたしは二度とそれを食べない」「神の王国が到来するまで、わたしはぶどうの木の産物を二度と飲まないの」と言われたのは、実際どういう意味として捉えるべきでしょうか。

キリストは再臨されたとき、文字通り、再び、パンと葡萄酒を飲食されるのでしょうか。そのパンと葡萄酒が、キリストの体また契約の血を意味してといわれ、またそれはあなた方（弟子たち）のためのものとも言われています。そうであるならなら、どうしてキリストご自身がそれに与るのでしょうか。実際、その最後の晩餐で、イエスは過ぎ越しの食事はされましたが、特別な意味のあるパンと葡萄酒をイエスご自身が飲食されたという記述はありません。そしてそれは当然のことと言えるでしょう。もしキリストが文字通りそうされるとすると、表現は適切さを欠きますが、比喩的とは言え、「自分の体を自分で食べる」

ということになってしまいます。

しかしその再臨の際の食事が、天の王国において行われるということなら、の時点ですでに、これ描写は比喩的な表現だということになります。

そうでないとすると、文字通り、地に再臨された時、その時、存在するクリスチャンたち、世界中に相当数いると思われる、クリスチャンの内、誰とどこで、その会食をされるのでしょうか。

これらのことから考えて、キリストが到来された時、パンと葡萄酒の晩餐を食べるのは、聖書中の様々なところで述べられている、天の王国での比喩的な婚宴の喜ばしい成就に言及していることに違いありません。

以下の聖句引用はこの論議の聖書の根拠となると思える章句です。

(ヨハネ 6:54 - 56)「わたしの肉を食し、わたしの血を飲む者は永遠の命を持ち、わたしはその人を終わりの日に復活させるでしょう。わたしの肉は真の食物であり、わたしの血は真の飲み物なのです。わたしの肉を食し、わたしの血を飲む者は、ずっとわたしと結びついているのであり、わたしもその者と結びついています。」

(啓示 19:7)「…子羊の結婚が到来し、その妻は支度を整えたからである。」

(啓示 19:9)「…子羊の結婚の晩さんに招かれた者たちは幸いである…」

(テサロニケ第一 4:16)「…主ご自身が号令とみ使いの頭の声また神のラッパと共に天から下られると、キリストと結ばれて死んでいる者たちが最初によみがえるからです…」

(マタイ 22:2)「天の王国は、自分の息子のために婚宴を設けた人、つまりそのような王のようになりました。」

(マタイ 25:10)「…に花婿が到着し、用意のできていた処女たちは、婚宴のため彼と共に中に入りました…」

最後の晩餐の「日を守る」ことについて：

では、記念式に関して、「日を守る」ことについてはどうでしょうか

今年のニサンの14日は太陽暦で何月何日だとか、満月の時であるべきだとか、ユダヤ歴で1日は夕方から始まるので、その土地の日没時刻が何時何分なのかを確かめるべきだとか言う論議にどんな聖書的根拠があるのでしょうか。

まず、イエスは、最後の晩餐で、「わたしを覚え（記念）」と言われましたが、この日を覚え（記念）なさいとは言われませんでした。

モーセの律法は廃されたとはっきり記されていますが、聖書は、ユダヤで守られてきた全ての「記念日」「宗教的祝祭」「年中行事」などに関して、逐一、これは、残存、これは廃止されたと、述べてはいません。

「特別な日」を記念することに関して、述べられているのはパウロの次の一節です。

(ローマ 14:5)「ある人は、ある日がほかの日に勝ると判断し、別の人は、どの日もほかのすべての日と同じであると判断します。おのおの自分の思いの中で得心していなさい。」

パウロはここで、「ただし『主の晩餐』だけは別です」などといった、何の例外も設けていません。

例えば、「結婚記念日」や「誕生日」、そして「主の晩餐」も含めて、「ある特別な日を守る」事に関して、ギリシャ語聖書は、何の肯定も否定もしていません。

それぞれ、各自自分の思いの中で得心していれば良い事で、「日を守る」ことに関する自分の信念や考えを他の人に説明したり、説得したり、勧めたり、強制したりするのは、聖書の著者に対する無礼であり、反抗であり、非聖書的であると言わねばなりません。

